

「インターラボセミナー」開催ご報告

東京大学大学院薬学系研究科微生物薬品化学教室

松本靖彦

「インターラボセミナー」は、日本細菌学会関東支部会の支援のもと、平成21年12月2日に東京都港区白金の北里大学薬学部にて開催された。本セミナーは、細菌学研究に従事している若手主催の研究室横断的な研究会である。

学会で口頭発表の機会が少ない若手研究者に発表、質疑応答及び座長の経験を積んでいただけるように工夫した。さらに、細菌学研究についての討論会と題した討論会を行い、若手研究者の細菌学研究にかける思いと問題点について共有し、議論した。参加者の合計は24人で、口頭発表は、10演題であった。発表時間12分、質疑応答7分だったので、質疑応答時間が長く、様々な質問が飛び交った。学生も率先して質問していた。発表者は、次の演題の座長をすることになっていたため、座長として質問者の指名や時間の管理を行った。細菌学研究についての討論会では、事前実施されていたアンケートの結果を私が発表し、細菌学研究の魅力、問題点、今後どのようにするべきかについてフランクに話し合った。この討論が予想以上に盛り上がったが、討論会の時間が短かったので、続きはおのおの情報交換会で議論することとなった。

本セミナーは、私を含めて、若手研究者達の訓練、お互いの親睦を深めるための貴重な機会となった。

最後に、本セミナーは北里大学の阿部章夫先生、千葉大学の高屋明子先生のご多大なるご尽力、並びに参加者の熱意により開催することができたと思っています。心より感謝申し上げます。

【参加者の内訳】

教授	1名
準教授	1名
助教	7名
博士研究員	1名
博士課程学生	6名
修士課程学生	7名
学部4年生	1名

【タイムテーブル】

13:50	開会の挨拶
14:00～17:40	口頭発表
17:50～18:30	細菌学研究についての討論会
19:00～21:00	情報交換会

演題と演者

第一セッション

14:00~15:00

- ① 黄色ブドウ球菌の糖尿病宿主に対する病原性発現機構の解析
発表者 宮崎 真也
所属 東京大学大学院薬学系研究科微生物薬品化学教室
- ② 外膜タンパク PagC 翻訳後制御によるサルモネラの membrane vesicle 形成
発表者 北川 良
所属 千葉大学大学院薬学系研究科微生物薬品化学教室
- ③ ボルデテラ属細菌のステルスエフェクターBopN の機能解析
発表者 永松 環奈
所属 北里大学大学院感染制御科学府細菌感染制御学研究室

第二セッション

15:10~16:10

- ④ *viaB*によるサルモネラ腸炎回避機構
発表者 羽田 健
所属 北里大学・薬学部・微生物学
- ⑤ カイコ感染症モデルを利用した抗感染症薬の探索
発表者 内田 龍児
所属 北里大学・薬学部・微生物薬品製造学教室
- ⑥ カイコの体液タンパク質 Apolipophorin は黄色ブドウ球菌の病原性を抑制する
発表者 花田 雄一
所属 東京大学大学院薬学系研究科微生物薬品化学教室

- ⑦ サルモネラによるマクロファージ Caspase-8 活性化制御
発表者 原 貴史
所属 千葉大学大学院薬学系研究科微生物薬品化学教室
- ⑧ ボルデテラ属細菌の新規 III 型エフェクターの同定と機能解析
発表者 久留島 潤
所属 北里大学大学院感染制御科学府細菌感染制御学研究室
- ⑨ *Chromobacterium violaceum* の病原性発現における III 型分泌機構の役割
発表者 三木 剛志
所属 北里大学・薬学部・微生物学
- ⑩ 微生物由来の新しい抗感染症活性物質の開拓とその標的分子の解析
発表者 小山 信裕
所属 北里大学・薬学部・微生物薬品製造学教室

* 発表時間 12 分、質疑応答 7 分です。

インターラボセミナー アンケート集計結果

① 将来、研究者になるつもりがありますか？

Yes	16人
No	1人
悩み中	1人

② 研究が楽しいと思うときはどんなときですか？

- ・自分の予想したような結果がでたとき
- ・自分が考えもしなかったような知見が得られた時
- ・仮説が正しいことを裏付ける結果を得られた時
- ・得られた結果から考える可能性について思いを巡らせているとき
- ・研究計画を立てているとき
- ・他の研究者と議論して考えが深まったとき
- ・自分の発見を他の研究者に納得してもらえたとき
- ・新しい発見をしたとき（生命現象の一端を紐解いたとき）
- ・実験しているとき

③ 10年後も細菌に関する研究をしていると思いますか？

Yes	9人
No	1人
わからない	8人

④ あなたが考える、細菌についての研究をする魅力とは？

- ・真核生物に比べゲノムがコンパクトであり、細胞内の現象をシステムとして理解することが近い将来可能であると考えられるところ
- ・病原性のものでなく、ヒトにとって有益な細菌を用いて健康に貢献できること
- ・生命の神秘に迫ることができる
- ・身近な（人間以外の）生物について理解を深められること
- ・目に見えないほど小さな生物なのに、生体内の現象は非常に複雑であるところ
- ・シンプルなところ
- ・増殖が速く、遺伝子欠損も容易なため、次々と研究立案、検証を行える
- ・病原菌が感染成立のための巧妙な戦略を備えていることを目の当たりにできる
- ・宿主と病原体をモデル動物として生物間相互作用について研究できる

⑤ あなたが考える、感染症研究の魅力とは？

- ・宿主の免疫応答と病原体-宿主間相互作用を研究することで宿主細胞における高次生命機能の解明につながる
- ・公衆衛生の向上に役立つ
- ・複数の種（bacteria, host）にまたがる研究であるということ。
- ・研究内容が後に感染症の新しい治療薬やワクチンなどの開発につながれば、本当にやりがいのある社会貢献度の高い研究であると思う
- ・古くから多くの人が研究しても、感染症がなくならないところ
- ・小さい生き物が大きな生き物相手にどう戦うか学べる（日本人として必要？）
- ・様々な感染症が世界中で蔓延しており研究のニーズが増大している

⑥ 細菌学研究に対する不満は？

- ・社会からそこまで注目されていない
- ・周りから、「それがわかったら何に役立つの？」とよく言われること

- ・生き物相手であり、予測がつかないところ
- ・若い人がいない
- ・関連雑誌のインパクトが少ない
- ・細胞生物学、有機化学、物理化学などの共同研究が少ない（閉鎖的）

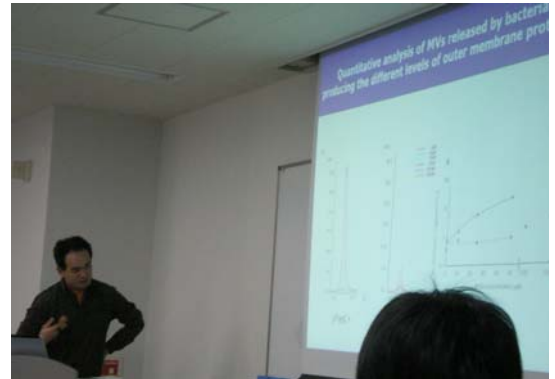
⑦ 若手細菌学研究者として、先輩研究者、及び日本細菌学会への要望は？

- ・細菌学研究を発展させてほしい
- ・若手の集まる小規模の発表・情報交換の場をもっと設けてほしい
- ・大手製薬企業では、感染症研究を縮小している。そのため、アカデミアが中心となって感染症研究を進められるようにすべき
- ・細菌学会総会、及び細菌学会誌等で、細菌学研究でどのような現象が問題となっているかクリアになるように工夫してほしい
- ・学会の暗い、固いイメージを払拭してほしい
- ・学会費を安くしてほしい
- ・総会においても若手が口頭発表できる機会をもっと増やしてほしい
- ・現在電子版だけとなっている日本細菌学会誌を冊子としても配布してほしい
あまりに現状、目に触る機会が少ない

写真



発表 1



発表 2



集合写真